

Book List ～沖芸の先生による、今読むべきこの15冊～ Vol.13

# 美術の本を楽しむ

## ～彫刻・現代アートを中心とした書籍15選～

選者：松本 隆

沖縄県立芸術大学美術工芸学部彫刻専攻教授  
東京都で1968年に生まれ、1992年に武蔵野美術大学造形学部彫刻学科を卒業した。彫刻家として創作活動をする傍ら、古典彫刻技法研究と執筆活動も積極的に行っている。

県立芸大の先生が  
選ぶおすすめ本!



### 『へらへらの彫刻』(戸田裕介編)

著者：石崎 尚・伊藤 誠・鞍掛純一・田中修二・戸田裕介・袴田京太郎・藤井 匡・松本 隆・森 啓輔 武蔵野美術大学出版局 2021年

/710.4/To17/

まずは彫刻に関するもので、私が関わった書籍の紹介から。この本は彫刻のいわば「へらへら」である表面という側面から、現代彫刻の概念を再構築しようという試みである。4人の批評家と5人の彫刻家によってさまざまな視点から論じられています。私は、第9章「金色と鏡—古代ギリシア彫刻からブランクシーへ」を書き下ろしました。そこでは古代の鏡、古代ギリシア、ロマネスク、定朝仏、ルネッサンス、そしてブランクシーといった古今東西の美術史の王道を行く傑作を事例に、「金色」というキーワードのもとに「光輝性」という観点から言及しています。近年、彫刻に関する書籍が少ない中で書かれた貴重な芸術論。



### 『わからない彫刻 つくる編 (彫刻の教科書 1)』 (富井大裕・藤井匡・山本一弥/編)

富井大裕・藤井匡・山本一弥・松本隆・黒川弘毅・細井篤・伊藤誠・桑名紗衣子・櫻井かえで・棚田康司・戸田裕介・長谷川さち・原一史・袴田京太郎・高柳恵里・AKI INOMATA・多和圭三 武蔵野美術大学出版局 2023年

/710/W25/

大学生向けの「彫刻の教科書」として作られた書籍ではありますが、一般的な読み物としても通用する内容です。教育の現場に身をおく作家たちの活きた言葉によって、様々な彫刻の実際や可能性が語られます。私の著した部分は、モデリング粘土A「粘土による塑造」、金属ブロンズA「ブロンズ鑄造—制作の実際」の2編で、粘土では彫刻の起源にまつわる話から、新しい土の造形、伝統的な塑造の工程を例示して、モデリングの可能性に言及しています。ブロンズでは、その複雑な工程に焦点を当てて解説しています。彫刻は多様であり、わからないものである。ゆえに奥深くて面白い媒体なのです。



### 『いちばん親切的な西洋美術史』

池上英洋 [ほか] / 著 -- 新星出版社 -- 2016.7

/702.3/I13/

私自身は、古代ギリシア彫刻の研究をしていて、もちろん拙稿を薦めたいところなのですが、洋書で専門書なので所蔵もない。蔵書を探してみるとギリシア彫刻に関連する新しい本は意外と少ないのです。ここでは西洋美術史の概説本ならば、それらの項目が多少あるので紹介したい。こちらは、私が過去に古代ギリシアの展示でお世話になったことのある、池上英洋さんによる監修で、観るポイントが明快に示されており、入門として最適です。気になる作家、作品があれば、さらにその名前で検索してみると、より詳しい本に出合えるでしょう。図書館を楽しむきっかけにも良いです。



### 『日本美術史 カラー版』

辻 惟雄／監修

-- 美術出版社 -- 2003.1

美術に興味を持った人や初心者にとって、まず手に取ってほしい本です。仏像に興味がある方には特におすすめです。他にも東洋美術史や西洋美術史などの「カラー版」シリーズがあり、どれもお勧めです。現代の一流美術史家が執筆しており、内容は広範囲にわたり、平易で読みやすく、図版も美しいです。

/702.1/N77/



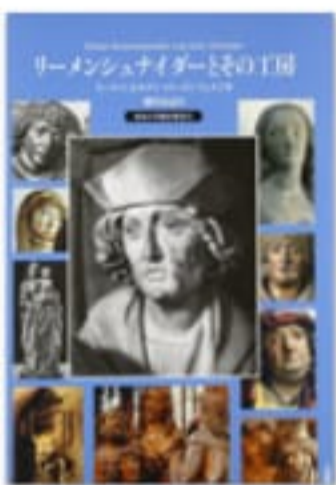
### 『アート・ウォッチング 現代美術編』

中村 英樹／監修・執筆

-- 美術出版社 -- 1993.9

私が若いころ、お世話になった故・中村英樹先生の執筆による本です。当時、先生は分かりにくいとされる現代美術を一般に広めたいという思いを語っていました。この本では、すべて日本で見ることのできる作品が紹介されており、絶好のガイドとなっています。

/702.06/N37/



### 『リーメンスナイダーとその工房 (阪南大学翻訳叢書 23)』

イーリス・カルデン・ローゼンフェルト／著

-- 文理閣 -- 2012.3

ルネサンスの巨匠ミケランジェロと同世代の彫刻家であるリーメンスナイダー。日本での認知度は低いですが、後期ゴシックを代表する大巨匠です。私自身、ドイツのクレクリンゲンにあるマリア祭壇を見たときは、この世のものとは思えぬほどで、その精緻な作風に息を飲みました。

/712.34/KA29/



### 『魂の形について』

多田 智満子／著

-- 白水社 -- 1981

私の好きな詩人でもある、多田智満子のエッセイです。私自身、彫刻作品「土タマシ」「水タマシ」というシリーズを制作している以上、靈魂の形を模索してきたといっただいでしょう。著者も言っているように、靈魂とは何かではなく、靈魂の形態について、古代の人々を参照し、考えを巡らせています。

/914.6/TA16/



### 『黒い聖母と悪魔の謎 (講談社学術文庫 1844)』

馬杉 宗夫／[著] -- 講談社 -- 2007.11

彫刻家を続けているからか、メジャーなものよりもマイナーなものに惹かれるようになってきました。その中でも特に面白いものが、ロマネスクの彫刻である。その図像は教会にありながら怪奇だったり淫乱だったりする。謎めいた「黒い聖母」についても、その由来などが解説されています。自著「金色と〜」で取り上げた《聖フォア》の黄金像も登場します。

B/702.099/U63/



### 『菩提樹の蔭』

中 勘助／著

-- 岩波書店 -- 1983

最後に彫刻が登場する小説を二編紹介したいです。彫刻家が主人公の小説で、古代ギリシアの「ピュグマリオン」の話、すなわち彫刻が生身の人間に変身する物語がモデルとなっています。ピュグマリオンが理想の彼女だとすると、こちらは亡き人への愛慕が発端となっています。愛をテーマとした、悲しい物語です。

/913.6/N31/



### 『彫刻 空白の時代、 戦時の彫刻 この国の彫刻 のはじまりへ』

小田原のどか 編著

1

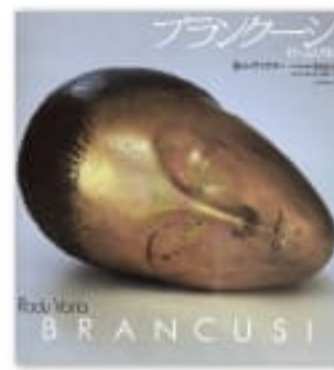
/710.8/O17/1

### 『彫刻 1 空白の時代、戦時の彫刻 / この国の彫刻のはじまりへ』

小田原のどか／編著

-- トポフィロ -- 2018.6

近年、彫刻に関する書籍が増えていますが、中でも小田原のどかの著書は注目に値します。この本では、多くの専門家が寄稿し、戦時彫刻や裸婦像の問題に切り込んでいます。また、彫刻の教育現場における作家へのインタビューなども含まれ、非常に興味深い内容となっています。



### 『ブランクーシ作品集』

ラドゥ・ヴァリア／著

-- リプロポート -- 1994.9

美術の本を楽しむ醍醐味は、やはり画集だろうと思います。大型の画集は、作品により近くなれる気がします。今回は1冊だけ選ぶとして、私が最も敬愛する彫刻家であるブランクーシの作品集を選びました。ブランクーシの研究の第一人者である中原佑介が監修しています。

L/712.391/B71/



### 『渋谷竜彦全集 14 旅のモザイク M・W・スワーンベリ 幻想の彼方へ 思考の紋章学 補遺 1976年』

渋谷 竜彦／著 -- 河出書房新社 -- 1994.7

私は大学生のころ、渋谷龍彦に傾倒しました。この号には私が好きな「幻想の彼方へ」が収録されています。レオノール・フィニー、スワンベルク、ゾンネンシュターンなど、妖しさ全開の作家たちが紹介されています。彼らを知らなかったら、私の作家としてのスタンスは別なものになっていたとも思います。

/918.68/SH21/14



### 『吉本隆明全著作集 8 作家論』

吉本 隆明／著

-- 勁草書房 -- 1973

作家論IIとして、彫刻家・詩人の高村光太郎を扱っています。彫刻に関する論考「彫刻のわからなさ」が収録されています。「彫刻はけっきょく、わたしにはよくわからない」というくだりは、彫刻の持つ問題を先見の眼をもって言い当てています。

/918.6/Y91/8



### 『膠を旅する』

内田 あぐり／監修

-- 国書刊行会 -- 2021.5

古くから絵画や彫刻、工芸の接着剤として利用されてきた膠。その膠がなくなるかもしれない危機に直面しています。本書は膠の現状や知られざる生産についての調査記録です。皮革産業に従事する人々の現場などが、リアルな写真を交えて構成されています。

/579.1/N73/



### 『夢十夜・草枕』

夏目 漱石／著

-- 集英社 -- 1992.12

「こんな夢を見た」ではじまる、幻想的な小品集「夢十夜」。第6夜は、明治の世に運慶に出くわす逸話となっていて、彫刻が題材になっている数少ない小説です。哀れに仁王を彫る主人公にユーモアを感じつつも、彫刻の核心的な議論もできそうな内容です。画工(画家)が主人公の名作「草枕」も収録されています。

B/913.6/N58/